



平塚 千穂子さん

CINEMA Chupki TABATA 代表

日本唯一の ユニバーサルシアター

千葉 「シネマ・チュプキ・タバタ」の話を最初に聞いた時には、「視覚障害のある方でも楽しめる映画館？」とまったく想像が付きませんでした。まずはどういう映画館なのか教えてください。

平塚 当館は視覚や聴覚に障害のあるお客さまにも、いつでも安心して映画を楽しんでいただけるよう、全作品に日本語字幕をつけて上映し、イヤホン音声ガイドを聴ける環境を整えています。また、館内後方の座席は可動式で、車いすユーザーの方は好きな所に入っているようにしています。さらに、親子鑑賞室という音量も照明もカスタマイズできる個室もあり、赤ちゃん連れの方、じっとしているのが苦手な発達障害の方、真っ暗が苦手、大きい音が苦手といった方にもご利用いただけます。

観てもらおう喜びと 観る喜びでつくる ユニバーサルシアター

「CINEMA Chupki TABATA (シネマ・チュプキ・タバタ)」は、視覚や聴覚に障害のある人も車いすユーザーも誰もが安心して映画を楽しめる映画館だ。上映する全作品に、言葉で映像を解説する音声ガイドと字幕を用意している。それらを製作するのは、「映画が好き」「映画製作に携わりたい」という気持ちで集ってくれた仲間たち。代表の平塚千穂子さん自身、「映画館に人生を救われた」ひとりで、そんな経験を分かち合いたいと、理想の映画館をオープンした。

インタビュー

千葉 正展

独立行政法人福祉医療機構経営サポートセンター シニアリサーチャー
本誌編集委員

千葉 本当にユニバーサルなのですね。いつオープンしたのですか。
平塚 2016(平成28)年9月1日オープンなので、今年6周年を迎えます。もともとは「City Lights」というボランティア団体を2001(平成13)年に立ちあげ、活動していました。視覚に障害のある方が映画を楽しめるように、言葉で映画を伝える活動をしていました。映画館で鑑賞会を開いたりするなかで、「いつかは自分たちの小屋をもちたい」という夢を抱き、それをかなえたのがここです。そして、せっかくなのでのならば誰もが安心して楽しめる映画館にと、ユニバーサルという、かたちになりました。

映画館に人生を救われた

千葉 City Lightsを立ちあげたきっかけは何だったのですか。

平塚 もともとは障害のある方と

を使って、皆さんには携帯ラジオを持ってイヤホンで聴いていただくようにしたのです。そういう鑑賞会をあちこちの映画館で開きました。さらに2008(平成20)年

からは年1回、「私たちの夢はいつかバリアフリー映画館をつくることとです」と発信し私たちがつくりたい映画館を1日だけ体験してもらおう「City Lights映画祭」を開催してきました。そうしたイベントのたびに募金活動もし、事業収入の余剰を貯金していったのです。

500万円ぐらい貯まったところで、いよいよ映画館を始めようとして、(東京都北区の)上中里駅かみなかぎのそばに小さなスペースを借りたのが、2014(平成26)年のことです。ところが、ある時、保健所の方が来て「映画館の申請をしていますか?」と。申請が必要だということも知らなかったのです。しかも、そこは商業エリアでもなければ、映画館として必要な消防

法の基準も満たしておらず、申請すらできませんでした。

千葉 そんな大変なことがあったのですね。

平塚 それでまた物件探しが始まったのですが、昔のフィルムは燃えやすいので、映画館として認められる建物の防火や避難対策に關する基準が高く、100件ほど物件を見たのですが、どこもダメでした。諦めかけていた頃に見つけたのが、今の場所(東京都北区田端たばた)です。足を踏み入れた瞬間に、奥にスクリーンがある光景がワッと見えたのです。しかも、消防法の基準もクリアしていました。ただ、防音工事だけで約1500万円かかることもわかり、即決はできなかつたのですが、遠とほ巡めぐしている背中を押してくれる人が現れ、覚悟を決めました。

映画が新しいお客さまを呼んでくる

千葉 高いハードルを越えて、

チャンスに巡り合えたのですね。

平塚 諦めかけた時に、チャンスはフワッと現れるんだなと思いましたが、写真設備や内装も含めて結局1800万円ほどかかったので、全額募金でまかなえたのです。City Lightsの活動をずっと支援してくださっていた方のほか、クラウドファンディングやインターネット上での呼びかけを見て大きな金額を寄付してくださった

方もいました。

千葉 オープン後は、City Lightsの活動を通して知った方がお客様になったのですか。

平塚 そうですね。今でもやっぱり視覚障害のある方が多いです。特に最初の頃は、「障害者のための映画館ができた」とメディアで紹介されたので、どなたでも安心して観に来ていただける環境を整えていることを知っていただけに、結構苦勞しました。3年ほど



千葉 正展 氏

たつてようやく障害当事者やその

支援者以外の方にも、そして近所の方にも知られて、常連さんも増えてきました。そんな「これから」というタイミングで新型コロナウイルスが発生して……。この時もミニシアターエイド基金という全国

のミニシアターを守る募金活動が起こり、支援していただき、おかげで今も続けられています。

千葉 コロナ禍で休業していた間は、そうした支援金と給付金等でカバーされていたのですか。

平塚 あと、年会費が3千、5千、1万円と選べるかたちのサポーター制度を設けています。メディアによく取り上げていただいたので、それを見て「応援したい」とサポーターになってくださる方もいますが、やっぱり多いのは、映画館に来たことがあって「続けてほしい」と思ってくれた方ですね。

千葉 1回で終わりではなく継続して支援していただく難しさはあ

りませんか。

平塚 確かにありますが、会員登録の更新前にお手紙をお送りすることはもちろん、上映前に予告編とともにサポーター会員の募集映像も流しています。ほかの映画館では上映していないような作品も多いので、それを目当てに来られる方もいて、新規のお客さまが当館を気に入ってサポーターになってくださることもあります。

千葉 ではどんな映画を上映するかという企画も大事ですね。

平塚 毎回苦労しています。まず上映作品に字幕と音声ガイドをつけなければいけないので、さすがに全作品を対応させることは不可能です。だから、これまでに上映会を開いたことのある作品も取り混ぜています。また、まだ全体の1割程度ですが、映画会社がアプリに対応した音声ガイドと字幕を用意している作品もあるので、そんな作品を選ぶこともあります。

字幕、音声ガイド 吹き替えもつくる

千葉 そんな便利なアプリがあるんですね。初めて知りました。

平塚 「UDCast」や「HELLO! MOVIE」という専用のアプリがあります。ユーザー側が観たい映画の音声ガイドを事前にダウンロードして映画館に行くと、映画が始まると同時に、その音声信号をキャッチして自動的に音声ガイドも始まるという仕組みになっています。ただ当館はミニシアターなので、小さい配給会社の作品が多く、バリアフリー環境の整った作品はほとんどありません。その場合、本編の素材や台本のテキストデータなどをお借りし、製作費はこちらで負担してつくっています。

千葉 そうなのですか。かなり手間がかかる仕事ですね。

平塚 2001年にCity Lightsを立ちあげ活動してきたなかで、

手伝ってくれる人も増え、ボランティアにやってくれる人たちが周りにいるからこそできています。

今ほどの映画館もサイクルが早く、2週間ぐらいで作品を入れ替えなければいけないので、月3、4本は1からつくっています。

千葉 支えてくれる人たちがいて成り立っているんですね。

平塚 吹き替え版のない外国映画の場合、台本を文字に起こして、キャストインクして収録しています。それは、声優をめざしていた人たちが手伝ってくれています。「今度この作品を上映するので、いつまでに収録をお願いします」とキャストインクディレクターに伝えると、協力してくれる方たちに連絡をとり、日程を調整し、配役を決めてくれます。

喜びを通じた

ギフトアンドテイク

千葉 観る側のメリットだけでは



受付のある1階フロアの天井。「チュプキ」はアイヌ語で、太陽、月、木漏れ日などあらゆる光をさす。人はそれぞれ違う「光」をもち、そのことを認め合える場所にしたいという映画館のコンセプトを表している

なく、つくる側も、声優をめざす人の夢を支えていたりするんですね。平塚 そうなんです。音声ガイドを書くにしても、繰り返し映像を見ながら言葉を考え、せりふの間にはめていくのは大変な作業です。でも、映画が好きで、映画製作に携わりたいと思っている人にとっては、自分が製作スタッフの一員になったような感覚で、作品

を新しい人たちに届けられることは大きな喜びなのです。薄謝で申し訳ないいつも思っていますが、「映画が好きだからやっている」という人たちのおかげで成り立っています。それに、そういうエネルギーで届けているから、受け取る側にも喜びになっているのかなと思います。

City Lightsの副代表を務めている視覚障害（全盲）のある方がよく言うのが、「障害のある人へのサポートは『何をしてほしいですか』と聞かれて、『やってほしいこと』をやってもらうことが多いが、City Lightsの人たちは『やりたいこと』をやっている、それが我われの『やってほしいこと』にもつながる」と。「この映画おもしろいから観て」と勧めてきたり、観終わっ

た作品について熱弁したりと、「そういう関係性は今までなかった」と喜んでくれています。

千葉 映画が中心にあることで、支援する側とされる側という線引きがなくなっていくんですね。

平塚 映画好きは熱心に聞いてくれる人がいると、うれしくてたくさんしゃべりたくなるのです。喜びを通じたギブアンドテイクが成り立って、それが活動の広がる原動力になったのかなと思います。

ユニバーサルがもっと「当たり前」に

千葉 次なる夢はありますか。

平塚 実は昨年、文化庁の助成金でドキュメンタリー映画をつくり、今秋公開に向けて準備をしているところです。この映画を通じてユニバーサルシアターの「みんなが観る」という価値観や豊かさを伝えていきたいと思っています。また、映画を観てくれた人が何かヒ

ントを得て、「見えない、聴こえない人にも楽しんでもらうにはどうしたらいいか」と考えたり、何かにチャレンジしようと思えたり、いろいろな広がりが見られることが楽しみです。そして、ユニバーサルな場所がもっとできていけば、それが「当たり前だよな」という価値観も広がっていくのではと夢を見ています。

千葉 最後に読者にメッセージをお願いします。

平塚 コロナ禍でより一層、映画館の役割について考えました。ひとつのスクリーンを見知らぬ人たちと一緒に観て、一緒に泣いたり笑ったりすることは希望につながると思うのですね。それは人種や障害の有無を超えた感動です。私も本当に支えられましたし、ぜひ一度体験しに来てほしいです。

千葉 今日のお話がまさに映画のストーリーのようで、感動しました。ありがとうございます。